CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

# 縄跳び遊びの一考察

曽　和　光　代

## はじめに

縄といえば何を思いうかべるだろうか。縄跳び・縄文式土器・物をしばる・縄ばしご・藁縄・注連縄等が考えられる。藁・縄・ひも，綱，これらの言葉を用途に応じてつかいわけている。しかし，我々が生活してゆく上で，これほど日本人の生活文化を反映してくれたものはない。稲作文化が初まり，副産物として「藁」が生れ，藁は我々日本人の生活の中に必需品として最近まで活躍をしてくれていた。藁については宮崎清著「藁」[※1]より

㈠　稲作農耕過程において産出される各種の副産物をむだなく生活の諸場面に用立てる「副産物活用文化」の中心であること。

㈡　衣，食，住，生業，運搬，祝祭，遊戯など，日常のみならず非日常生活の全面にわたって展開されたものであること。

㈢　「非ワラの文化」と相補的関係において発展してきたものである。

㈣　特にものづくりの素材として活用され，世界に類をみることができない美的造形が常民の手によって展開されたこと。

以上の四項目にまとめ上げられている。藁より綯って「縄」ができ「綱」ができ上る。しかし，この稲作文化の副産物として生れた「藁」ができる以前から，「縄」はあったのである。「縄」については「日本風俗史事典」[※2]によれば，

『植物の繊維を撚り合せて長い条としたもので，物を縛るのに用いる。一般には藁を二つ撚りに撚ったもので藁縄のことを縄と呼ぶが，このほか麻縄・棕梠縄・蕨(わらび)縄などもある。また特殊な材料としては，繊維部分を利用した檜・松の縄，または樹皮部を利用したアオギリ・杉・サワラ・カバの縄などがある。福井県の鳥浜貝塚から発掘された縄文前期の縄がわが国最古の遺物である。』と述べられてあり，藁のなかった時代には，草のつるや，木の繊維等で綯って縄

を作り，それらが運搬用や，作業用に使われており，藁でない「縄文化」が初まっていることになる。縄文化は人間生活によって営まれた。実際，我々が現在縄とびに使用している縄は藁ではなく，ビニールや麻，綿等でできており，綱引きの綱は麻でできている場合が多いが，短縄はビニールが多くなってきている。しかし，昭和20年代から昭和30年位までは，炭俵や米俵をくくりつけてあった藁縄は，その時代の子ども達にとって遊びに使う遊具の一つであったことは確かである。縄は一番身近に昔からあった必要度の高かった用具の一つだったと考えられる。したがって，日常生活の必需品として使用する以外に，神事や畑の肥料，そして遊びにも使われたと考えられる。

縄跳び遊びについてはあまり古い資料が残されていないが，藁縄をつかったその他の遊びについては，ワラ人形，ワラ馬，ワラデッポウ等藁の段階で作って遊んだり摩よけに使ったりした。又，綱引き，ブランコ，ソリ等，藁や縄を使った遊びは，生活の必需品となったのとほぼ平行して初まったのではないかと思われる。そんな身近な「縄」の遊びの魅力はどこにあるのだろうか。短くても長くても，その遊び方や楽しみ方がそれぞれちがっている。年齢にあわせて，又，その時代や生活文化のちがいによって「縄」と「生活文化」さらに「運動文化」の発達ともからんでくる。今日，素材は変っているが，縄は遊びとしても，トレーニング用としてもすてきれない用具である。

この脇役である「縄」のおもしろさをさぐりながら，縄遊びの運動文化をみてゆきたい。

## I　縄文化と子どもの遊び

子どもは何も高価な用具がなくても楽しい遊び方を工夫してくれる。おそらく縄を使った遊びも古くから生活の中で子ども達が発明し工夫して遊んでいたのではないかと思われる。縄自体も，原始生活の時代には草のつるや，繊維質のようなもので綯っていたか，そのままつるの状態で使って生活してゆく中で戯れ遊ぶこともあったかもしれないが，まずは食物を手に入れることが第一の目的であったろう。そのための運搬用にまずは使用されていただろうと考えら

れる。人類が発生し，生活の必要性に応じて物を結んだり，連ねたり，束ねたりするために，色々な繊維を用いる知恵が生れたのは相当古いことである。稲作文化が初まった以前から縄はあり，これらの縄類は，生きてゆくために欠かせないものであったであろう。ここで縄類と呼んだが，我々はその用途に応じて「ひも」「縄」「綱」と呼び名を変える。小さな物をまとめる時は「ひも」で結え。中位の物は「縄」でくくり。大きな物は「綱」で引っぱる。と言葉が変ってくる。もちろん用途に応じてロープのふとさがちがっているのも呼び名のちがいにある。遊びの中でも引っぱり合いする場合は，「縄引き」とは言わず「綱引き」と言うのはおもしろい。この縄類は人類が地球上にあらわれ獲得した獲物を運ぶのに必要であったことは察しがつく。一日の大半が食べ物さがしにかけていた原始時代から現在に至るまで，ひも・縄・綱が素材のちがいはあっても大いに使用されていたと思われる。子ども達も親と一緒に食べ物をさがし歩いた時代からだんだんと文化が進み，食料の保存方法や畑を耕したりして食料を確保し定住することになる。畑では稲作が初まり，作物の農作を願う祭り事が行事となりその儀式に「藁」が使用されていったのであろう。

稲作文化が初まり副産物として「藁」が生れたが，現在でも「藁」で注連縄飾りを作り正月を祝い，新しい年を迎える。正月が終れば「トンド」を行い，注連縄や松飾りを燃やし，家のまわりにその灰を置いて摩よけ厄よけとする。これらの行事も地方によってちがってくるが，「トンド」の火祭りのために，各家々の注連縄類をもらい集めるのは，どこの部落でもたいがい子ども達であったらしく，子ども達が注連縄や松飾りを集めることを，東京の西多摩や南多摩地方では「オマツヒキ」，兵庫県城崎郡竹野町では「キツネガリ」，九州では「オニビ・ホケンギョウ」等と称し，高知県宿毛(すくも)市や高岡郡土佐町の海岸部では，東西二組に分れた子ども達が注連縄や正月飾りを燃やした。その燃え具合を競って，両組の子どもたちがけんかをすることもあったそうだ。その他，千葉県成田市や茨城県南部の霞ケ浦周辺にみられる盆に「ワラ蛇」や「竜」をつくり，子ども達がそれを担って，各家々を回る盆綱行事は精霊がワラ蛇に乗って家に帰って来るという信仰からおこった。奈良県の野神祭りは，子ども組が

中心となる祭りで，子ども達がワラ蛇をつくって村中引き回したらしい。又，「藁」を綯うのも子どもが大人と成長してゆくために，必ず身に付けておかなければならない生活技術であったらしく，縄は生活に欠かせない必需の物資であった。綱引きもかつては神事（呪術信仰的）であった。綱を相互に引くことによって，神意を伺ったり豊凶を占ったりしていたらしく，これらの綱引きは大人が中心となり行うが綱を作るための「藁」を集めてくるのは子ども達が主であったらしい。その他，ワラ馬や稲株アネコ（人形）等「藁」でできた玩具もあった。現在でも観光地でおみやげ用として「ワラぐつ」や「ワラ馬」をみかける。

神社仏閣では正月や節句ごとに昔ながらの行事を行っている所もあるが，一般人が参加して行う祭り事や子ども行事が少なくなってしまった。村あげて，町あげての祭り事はなく，テレビ中継で見たり，見物気分ででかけたりする。人々の祭りに対する考え方が変ってくることは生活様式の変化にあり縄に対する考え方も変ってきている。

「ひも」「縄」「綱」と我々の生活に欠かすことのできない用具の一つであるが，それらが日常生活の中で活躍するだけでなく，生活文化が発達するにつれ，余暇ができゆとりの時間は身近に手に入る縄類を使って祭り事や占い事以外に遊びへと発展してゆく。

現在では「ひも」をつかっての遊びには「あやとり」があり，室内で子ども達に楽しまれている。もともと「あやとり」も占いに使われていた。「縄」は縄跳びのために子ども達に使われ遊ばれている。大人も健康や体力づくりに縄跳びを行う。日本での縄跳びの起源は，はっきりしないが，江戸時代では短縄の一人とびらしきものは行っていたようだが，長縄跳びはあまり跳ばなかったようである。集団遊戯としての縄跳びは明治以後欧米から入ってきたものである。数えるだけの跳び方から歌に合せて跳ぶようになり，跳び方も工夫をこらし，大正時代以降，縄跳び歌は流行し，伝承されていった。昭和になってとくに盛んになったのは，活動しやすい洋服の普及も，その一つの理由であり，今日では歌をともなう縄跳びについては，特に女の子に好まれて遊ばれている。

トレーニングや体力づくりのためには，男の子に好まれて行なわれている。縄跳びは，短なわ，長なわと長さに応じて遊び方が変ってくる。遊び方の種類も多い。

現在の縄跳びはビニール製のものが多いが，昭和20年代では子ども達が遊んだ縄は「藁縄」であった。子ども達は炭俵等にくくりつけられていた縄を親からもらい縄跳びをした。ワラ縄は軽くて跳びにくいものであったが子ども達は工夫して遊んだ。跳ぶたびに地面に縄が当るので地面に当る部分が切れてしまうその部分を結びつなげると丁度それが重みとなって跳びやすくなることもあった。

今日では遊びだけでなく，各スポーツ種目の基礎トレーニングにも活用されている。新体操の手具にもなっている。「綱」は綱引きがあり，運動会などでは必ずといって良いくらいプログラムに組まれている。最近では各地で綱引き大会が行なわれている。かつて綱引き行事が持っていた呪術信仰的要素はきえてしまった。

以上のように「ひも」「縄」「綱」も生活文化の発達と共に変っていった。

## Ⅱ　縄跳び遊びの発達

古くから生活の必需品であった縄も現在では子ども達の遊びからスポーツ活動や体育活動用具として発展してきた。

特に歌をともなう縄跳び遊びについては，その時代の背景がよみこまれているのでおもしろいものがある。

わらべ歌は縄跳び歌に限らずその時代の社会的背景が大きく左右して歌詞も時代や地方によっても少しづつちがっている。縄跳びを行いながら歌をうたいリズムをとって跳ぶ事は跳びやすく流れをスムースにしてくれる。

縄跳び歌で，ほぼ全国的に歌われている歌に「郵便屋さん」がある。地方により多少の歌詞のちがいはあるが，江戸時代の飛脚にとってかわって，近代的な郵便事業が政府によって各家を訪れる配達人は子ども達には「郵便屋さん」といって親しまれて，当時の子ども達の話題であったらしい。兵庫県では，但

馬の山奥まで配達されるようになり，野良に出ていたお百姓は郵便配達がめずらしく，「郵便さん何時だえ」と時を聞く。その心情や文明開化の世相をよく表現している情景であったらしく，それを子ども達が縄とび歌としてとり入れたらしい。一種のからかい歌となって伝承されている。又，歌詞に「お上のご用」「罰金」「懲役」「時間」等がおりこまれており，その当時の時刻制限のきびしかったこともうかがえる。

歌の例として，

1）　郵便さん何時だえ　　（兵庫県美方郡温泉町照来）

郵便さん何時だえ
尾々田の坂から，日が暮れて
提灯とぼして　エッサッサ

2）　郵便さんははよ来んさい　（広島日双三郡布野村戸河内）

郵便さんはよ来んさい
時間におくれりゃ罰金よ

3）　郵便さん　　（京都府天田郡夜久野町）

郵便さん　おはいり
十時がすんだら　罰金よ
罰金どころか　懲役よ
懲役どころか　首切りよ

4）　郵便屋さん　　（千葉県香取郡山田町米野井）

郵便さん　早走れ
もうかれこれ十二時だ
一時　二時　三時　四時　五時　六時
七時　八時　九時　十時　十一時　十二時

5）　郵便屋さん　　（東京都板橋区坂下）

郵便屋さん　落とし物　拾ってあげましょ

一枚　二枚　三枚　四枚　五枚　六枚

七枚　八枚　九枚　十枚　十一枚　十二枚

ありがとう

以上5つほど例を示したが，東京都の歌詞が現在もよく歌われているように思われる。落し物の部分を「ハガキが十枚落ちました」と歌う所もあり，郵便屋さん「こんにちわ」と挨拶の入る所もある。

郵便屋さんは一例であるが，他に縄跳び歌は多くある。わらべ歌をうたいながら縄跳びをする子どもの光景をあまり見かけなくなったが，学校教育の中で何らかの形で伝承されている事は確かである。

縄跳び遊びについて，半澤敏郎著「童遊文化史」※3の縄跳びの章の中の総括の部分で『縄跳びは，素朴であるが，子どもの本性にかなった，ごく自然な遊びということができよう，こうした見地から，かなり古い時代からの伝承遊びとばかり思っていた。しかしなぜか，古い文献に見ることができない。そうかといって，近代的な新しい遊びとはとても考えられない。そこで，縄跳びの史的考察の手がかりを遊具である縄に求め，創始考察の一端としたい。』と述べられている。

まわれまわれ，風船球つき，縄とび，手鞠つき，羽根つき　「東京風俗志」より

しかし明治時代では縄跳びに関する文献や挿絵等がある。平出樫二郎著「東京風俗志」※4の児戯の節で女の子が着物をきて縄跳びをする光景がある。

たやすく手に入る藁縄は子ども達の身近にあり，誰れが考えだしたものでもなく，人間の基本運動である走・跳・投の中の一つである跳ぶ運動を縄跳びとして遊び，その他走りながら跳ぶ事も可能にしてくれる。縄をまとめればボールの代りにもなり投げる遊びもできる。自然に子ども達の間で遊ばれていたと考えても不思議ではないと思われる。

縄跳び遊びが明治以前にあまりなかった事について，小泉文夫著「子どもの遊びとうた」※5の“なわとび”がもたらした新しいリズムの中で「リズム感との関係でいえば，子どもの遊びにはもう一つ重要なものがあります。それは“なわとび”です。“なわとび”という遊びは，明治以前にはなかったといわれています。古いわらべうたを調べてみると，お手合わせ，お手玉，手毬などは必ず出てきますが，“なわとび”が出てくるのは大正以後で，明治にあったとしても歌が残るほど重要ではなかったでしょう。いずれにしても，「なわとびうた」はとても新しく，潑剌としています。「お嬢さんお入んなさい…」「郵便屋さん博覧会…」「熊さん熊さん回れ右…」など，明るい表情とその当時新鮮に響いた単語がとび出してきます。

しかし，ここで私が問題にしたいのは，この“なわとび”のリズムが，それまでの日本の伝統的なリズムと著しく異なったものであり，これによって日本の子どもたちは，新しい遊びや単語ばかりでなく，新しい外来のリズムをひとりでに身につけることになったということです。つまり，伝統的なリズムでは歌詞のあたまから手を打ったり，まりをついたりすればよいのですが，“なわとび”では，歌のリズムよりも前に体の準備が必要です。拍子の前に跳び上がり，地面に落ちるときはじめて歌の第一拍と合うことになるのです。

たとえば「大波，小波」という歌では，「**おお**な**な**み，**こ**な**み**，**ぐ**るりと**ま**わって，**ネ**コの**目**」と太字の部分が強拍ないし第一拍ですが，これらの拍の前に体は空中に上がっていなければならない。この強拍の前に相当のエネルギーが必要なので，強拍がきてから動きだす子はタイミングを外してしまい，うまく

なわを跳ぶことができません。こんなリズムは，ほかの伝統的な遊びには決して出てこないのです。

日本の伝統的な遊びや踊りには，上下動というものはあまり現れません。能の仕舞や地唄舞は水面を静かに動く水鳥のようですし，農民の踊りの多くも上下動がほとんどない。もっとも活発な阿波踊りですら，腰をグッと低く落としています。私はこれらの踊りの姿勢を，日本人が弥生時代からもっていた水田農耕に基づく文化のせいだと考えています。水田に生活する人が，人間が本来もっている跳び上がる運動を極力おさえて，泥水をはね上げないように注意する習性を身につけ，それが遊びや踊りにも現れたとしても，少しも不思議ではありません。このため日本には，二本の足に常に，または交互に均等の重心がかかる安定した二拍子系のリズムしかなく，三拍子系のリズムが発達しませんでした。これと同じことは，長い水田農耕の習慣をもつ東南アジア一帯に広く見られます。

そうした土壌の上に“なわとび”という子どもの遊びが導入され，そこにはじめて上下動という要素がリズムの基本として現れたのですから，これは大げさにいえば，弥生時代以来のリズム革命といわなくてはなりません。そのうえ“なわとび”はもう一つの新しい要素をもち込みました。それは強弱です。

日本の伝統的なリズムでは強弱という要素は拍節を決定する基本要素ではありません。言語のアクセントが英語やドイツ語のようにストレスによる力点ではなく，日本語の場合高低によるアクセントです。それと同じく，日本の二拍子は強拍と弱拍との結合でできているのではなく，何か別のものです。その別のものが何かという問題は，さしあたってここでの課題ではありませんので説明を省略しますが，私は前拍と後拍というふうに区別しています。

ところで，“なわとび”では，特殊な場合を除いて，奇数拍ではなわを跳び，偶数拍では予備運動としての小さなジャンプを行う，というのが基本運動です。したがって，子どもが遊んでいるのを見ていると，奇数拍では大きく跳び上り，偶数拍では地面から足がやっと離れるか離れないかの程度に体を浮かしている。この規則的な交替が，前拍・後拍というより，強拍・弱拍としてのリ

ズムの構造を作り出します。学校で教育する音楽は別として，子どもが，あるいは日本人が自発的に強弱リズムを，つまりある面で西洋音楽と共通したリズム感を身につける最初のものが，“なわとび”なのです」と述べられており，引用文が長くなってしまったが，著者の意考をこちらがまとめてイメージを曲げてしまってはと思い“なわとび”の部分をそのまま引用させていただいた。これらから，音楽のリズムと動きのリズムのからみ，日本古来の民族が培ってきたリズムと西洋のリズム，日本古来のリズムと縄跳びのリズムのちがい，西洋のリズムと縄跳びのリズムの類似，これらから，明治以後西洋文化が入って来るまで今日のような縄跳びはとばれていなかっただろうと考えられる。その上，極力泥水をはね上げないように跳ぶことをおさえていた事。水田農耕民族の生活の知恵なのかもしれなかった。このあたりが，古来縄跳びが行われなかった理由の一つであるのはおもしろい。西洋ではいつ頃から跳んでいたのかさぐってみる必要がある。このことで日本では今日のリズムで縄跳びがとばれたのは最近の事ということになる。

「生活文化」のちがいが「音楽のリズム」「運動のリズム」にも影響を与え，しいては「遊びの文化」にもおよんでくる。

幼い頃には，こういったことを考えながら縄跳びを行ってはいなかったが，夏の暑い日をのぞけば誰れかが縄跳びをしていたように思う。最近，サッカーや野球をしている少年を小学校のグランドでみかけるが，このような伝承遊びを行っている姿をあまりみかけない。

この伝承遊びについて前記の半澤敏郎著「童遊文化史」※6の同じく，なわとび<縄跳び>の章で以下の文章でくくっておられる。「戦後殊に昭和四十年以降は，高度成長の美名を隠れみのとし，日本列島改造論まで出され，社会的，世相的にも変革がもたらされ，生活環境は急変の一途をたどることになった。そのため，子供の世界は，戦争に続いて再び破壊され，剝奪され，遊びの場を失った。その結果，これまでの伝承遊びは下降の一途をたどることを余儀なくされた。遊戯史上，かつて見ることのない危機を迎えたといっても過言ではない。こうした中にあって他の伝承遊びに比べれば，縄跳びの遊事生命は，ある

面，ある意味においては，健在といえないでもない。しかし，遊びの本質論の観点から，童遊びを中心に考えれば，異論の余地はかなり残されることになる。それでも，スポーツの基礎体力作り，トレーニング，更に一般的には，美容運動，健康管理などの各面において脚光を浴び推奨されていることは事実であり，かつて見ることのなかった現象である。このことについて，あえて反論の意思は毛頭なく，賛意を表しているというのが偽らざる本心である。しかし願わくばこうしたことが，子供の世界に甦り，ここかしこに彼らの縄を跳ぶ姿が，常時目に映る世であることを望んでやまない。」と締められている。

縄跳びに関しては，多くの跳び方や遊び方，トレーニング方法を示した書物をみかける。最近，わらべ歌をともなう子ども達の縄跳び光景を見かけなくなった。跳び方の技術指導縄さばきの技術など，大人の指導の下で行なわれることが多い。小学校の体育教科の中での「なわとび」も，跳び方の技術指導が多い。しかし，低学年において伝承遊びの指導もうけている。この場合，子どもの管理下にある伝承遊びと少し異ってくるであろう。

子どもの管理下で，その時代を反映している歌をともなって，跳び方やルールが子ども達の手で変ってゆくのも伝承遊びのおもしろさである。あまりにも技術指導中心になった縄跳び指導は，幼少期には賛成できない。

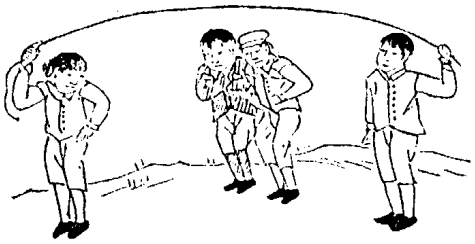
現在では，体力づくり，健康維持，各スポーツ種目の基礎トレーニングとして，レクリエーションに，徒手体操や新体操の手具として，等々，こども遊びの縄跳びの域を脱している活躍ぶりである。運動効果も大きく，運動をする場所もとらないので縄跳びそのものは廃れることはないであろう。

## Ⅲ　縄跳びの体育的価値

縄跳びは運動効果も高く体育教材として用いられても不思議でない。体育教材として縄跳び運動が初められたのは，日本レクリエーション協会編「遊びの大事典」[※7]の「３わが国の近代以後の遊び」―子ども遊びの継承と移入―の中で「近代になって，子どもの〔できばえをくらべる〕身体的競戯は，1872（明治５）年の学制制定以後，学校における「体術」（翌1873年から「体操」）の実施

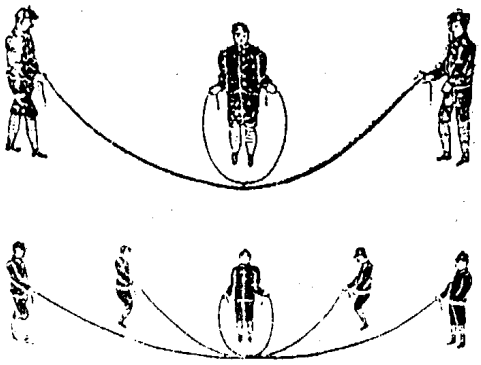
によって，新しい内容の登場をみることになる。その代表的な例が「縄跳び」と「馬跳び」である。

1886（明治19）年刊の岡本岱次郎編『簡易戸外遊戯法』には「縄飛び」の名称で，「長縄とび」がみられ，また同年の相沢英二郎他編『小学校遊戯法』には，「廻縄跳入」の名で「長縄とび」が，「縄跳」の名で「短縄とび」およびそれによる競争が紹介されている。1888（明治21）年刊の瀬戸幸七郎著『小学校用新式戸外遊戯術』では，「短縄とび」は「回転縄飛」とあって，「此遊戯ハ演習者ノ多少ニ関セズ，各自為ス事ヲ得ル至良ノ運動」と記している。この学校での体育としての身体運動は，やがて子ども遊びとして行われるようになる。……中略……



回転縄飛。「（小学校用）新式戸外遊戯術」より

学校における「縄跳び」も，1906（明治39）年刊『小学適用遊戯全書』に「本戯は特に遊戯時間内に於いて教師監督の下に演ぜしめざるも，平常各遊



縄飛び演技図。上から，尋常科第三学年男子。尋常科第五学年男子。高等科第一学年男子。高等科第二学年男子。『小学適用遊戯全書』より

戯時間中及び基他の場合に於いて，各自娯楽的に或は個人的競争に最も適当なる運動法あり，又児童自身にも自然に希望する処の遊戯」であるとあり，「学校内及家庭に於て」「充分奨励する価値あるべし」と，学校以外での遊びとして奨励しているのである。」と述べられている。

以上のことから，1873年には「体操」の実施で新しい内容となり，より縄跳びの運動効果が深められている。1906年には学校だけでなく家庭に於ても実施する価値を認めており縄跳びの爆発的な流行をまねいたのであろう。その後，大正から昭和にかけて，子ども遊びとして広く行なわれている。「縄跳び」は跳ぶ回数を競うもの，色々な跳び方をクリアするもの，歌をうたいながら跳ぶもの等，特に女児に好まれた遊びであったようだ。

学校教育の中にとり入れられたのが明治5年。その後学校においても家庭においても「縄とび」が奨励され，流行する。広い場所もとらず，経済的で運動効果も高いことから，導入もしやすい。集団的遊戯も可能なので，体育的価値はもちろんのこと，教育的価値も大きい。

教科書に登場したなわとび『尋常小学読本』巻一（文部省，明治43年）より

今日においても学校教育にとり入れられている。体育の授業の中で，又，運動会行事の中で実施されている。

縄跳びの運動効果として上げられることがらは，次のようなことが考えられる。

1）身近で安く手に入る用具である。

2）一本の縄さえあれば，いつでも，どこでも，そう広い場所をとらず実施することができる。

3）一人でも大人数でも人数にあわせてプログラムが組める。

4）皆んなが知っている基本的な運動のくり返しなので，家庭の主婦や子ども達にも愛用される。

5）スポーツマンの体力作りや，基礎トレーニングとして実施することもできる。

6）跳び上る運動の連続であるから，全身の筋肉を調和的に動かすとともに呼吸循環機能を高め，持久力を養う。

7）変化のある跳び方をすることによって，器用さや敏捷性を高め，リズミカルな身体をつくる。

等があげられ，縄を使用するだけでより楽しく基本的な運動能力や体力が養われる。それ以上の運動能力をも養うことも可能となる。縄跳びだけですべての運動能力が養なわれると言ってしまうことには問題があるが，身近にできる運動の一つである。

## おわりに

以上のことがらからわずかながらにも，生活文化の発展と共に子ども達の遊びも変ってゆき，生活の必需品であった藁縄も，信仰や占い事，祭り事の行事以外に子ども達の玩具にもなってゆく。明治に入り，文明開花と共に，欧米より異った生活文化が流れこみ，学制制度もひかれ，子ども達は学校へゆくようになると，子ども達自身にもゆとりができ，家の仕事を手伝う代りに集団での教育をうけ初めた。欧米から入ってきた教育制度により，縄遊び一つとり上げてみても，今まで日本になかったリズムで縄跳び遊びが行なわれ，歌のリズムも西洋リズムになった。歌詞はその時代を反映する文句が歌いこまれ，欧米から入って来たリズムでどんどんと，子ども達によって歌詞がよみかえられ，今日に伝承されている。

小泉文夫著の「こどもの遊びとうた」によって，なぜ稲作文化からでた副産物である「藁」が昔から日本にあるのに，藁縄を使っての遊びの中に，縄跳びが入ってこなかったのか少しは理解できたように思える。水田農耕民族の間では，西洋のリズムがそだたなかったこともわかった。

欧米の乾燥した気候，風土と湿気の多い日本の気候，風土では生活様式も変って当然のことである。従って，遊び方も異ってくるであろうと考えられる。

当りまえのことといえば当りまえのことであるが，欧米と外交ができ初めると，どんどん欧米文化が日本に流れこんできた。民族が作りだした，音楽のリズムや運動のリズム，生活のリズム等，これらすべて生きてゆくために，民族が育み継承してきた。生活文化が変ればすべてのリズムが異ってゆく。現在日本人の生活文化は戦後大きく変った。せめて，子ども達の遊びの中に日本民族が育んできたリズムも大切にしたい気もする。

時代の流れで日本人の生活文化も変ってゆき，それにともなって子ども達の遊びの文化も変ってゆく。

縄跳びの運動文化もそれにつれて変ってきた。縄跳び遊びも伝承遊びの一つになっているので，トレーニング用や体力，健康づくりに活用しながら，伝承遊びとしての縄跳び遊びも子ども達に伝えてゆきたい。

現在本学では，親と子の体育遊びで，三種類の縄をつかって縄遊びをしている。短縄や長縄が切れたりしてしまえば，さらに使える部分を80cm位の長さに切りミニ縄を作って，幼児の縄遊びの導入に使っているが，子ども達はこの縄が好きである。回したり，おしっぽにしたりして遊んでいる。危険もなく重宝している。

縄とは人間と切りはなせない不思議な用具である。

## 引　用　文　献


※1　藁（わら）Ⅰ　宮崎清著
　　P.18～P19　法政大学出版局
　　1985年

※2　日本風俗史事典　日本風俗史学会編
　　P.473　弘文堂
　　1979年

※3　童遊文化史3
　　一考現に基づく考証的研究一
　　P.429　半澤敏郎
　　東京書籍
　　1981年

※4　東京風俗志　　平出鏗二郎
　　P.261　　東洋文庫　八坂書店
　　1991年

※5　子どもの遊びとうた
　　—わらべは生きている—
　　P.111～114　　小泉文夫
　　草思社
　　1986年

※6　童遊文化史3
　　—考現に基づく考証的研究—
　　P.430　　半澤敏郎
　　東京書籍
　　1981年

※7　遊びの大事典　　(財)日本レクリエーション協会
　　P.311　　東京書籍
　　1989年

## 参　考　文　献


1．遊びの大事典　　○(財)日本レクリエーション協会
　　○東京書籍
　　○1989年

2．日本風俗史事典　　○日本風俗史学会編
　　○弘文堂
　　○1979年

3．東京風俗志　　○平出鏗二郎著
　　○八坂書店
　　○1991年

4．日本の遊戯　　○小高吉三郎
　　○羽田書店
　　○1950年

5．童遊文化史3　　○半澤敏郎
　　○東京書籍
　　○1980年

6．藁（わら）Ⅰ　　○宮崎　清

○法政大学出版局
○1985年

7．ひも　○額田　巌
○法政大学出版局
○1986年

8．なわとび　○古屋三郎
—体育図書館シリーズ—㉘　○不昧堂出版
○1972年

9．小学校指導書　○文部省
体育編　○東洋館出版社
○1989年

10．ロープワーク入門　○佐野　豪
○遊戯社
○1985年

11．なわとび・民舞　○学校体育研究同志会
○ベースボールマガジン社
○1988年

12．兵庫県につたわるこどもの遊び　○兵庫県小学校教育研究会体育部会
○光文書院
○1985年

13．レクリエーション事典　○監修
(財)日本レクリエーション協会
○不昧堂出版
○1981年

14．子どもの遊びとうた　○小泉文夫
○草思社
○1986年

15．日本わらべ全集　○柳原書店
—北海道のわらべ歌—　松本達雄
更科源蔵
1985年

—秋田・山形のわらべ歌—　佐々木昭元
佐藤金勇
武田正
1981年

| | |
|---|---|
| ―千葉のわらべ歌― | 尾原昭夫<br>1984年 |
| ―東京のわらべ歌― | 尾原昭夫<br>1979年 |
| ―石川のわらべ歌― | 小林輝冶<br>1986年 |
| ―愛知のわらべ歌― | 服部勇次<br>1981年 |
| ―京都のわらべ歌― | 高橋美知子<br>1979年 |
| ―大阪のわらべ歌― | 右田伊佐雄<br>1980年 |
| ―兵庫のわらべ歌― | 長谷坂栄治<br>1987年 |
| ―岡山のわらべ歌― | 稲田和子<br>奥山勝太郎<br>1985年 |
| ―広島のわらべ歌― | 友久武文<br>原田宏司<br>1984年 |
| ―徳島高知のわらべ歌― | 園尾正夫<br>近森敏夫<br>1981年 |
| ―大分のわらべ歌― | 吉良長幸<br>加藤正人<br>1987年 |
| ―鹿児島沖縄のわらべ歌― | 久保けんお<br>杉本信夫<br>高江洲義寛 |